〈 東北・新潟の活性化応援プログラム 〉
2020年 助成団体活動成果レポート

助成団体

海の見える命の森 実行委員会

宮城県本吉郡南三陸町

プロジェクト名

森づくり、小屋づくり、井戸掘り、炊事場の整備（かまど、ビザ釜づくり等）減災体験により災害に備える活動人口を増やそう

■地域の課題

ハイテク技術の発達により私達は便利な生活をしています。自然災害発災時には生活インフラが破綻され生きる事が困難になります。そうした時でも生き抜く事が出来る技術を学べる場が必要と考えています。

被災から10年目を迎え復興事業のハード面は、ほぼ整備されようとしていますが従来あった生業の復活はまだまだです。ラムサール条約の指定地に志津川湾がなり、かき養殖や木材の世界認証がされても経済活性には結びついていない現状です。

■当団体の紹介

東日本大震災後、整備をはじめた「海の見える命の森」を活動拠点として、全国から参加者を募り、自然災害で生活インフラが途絶した場合にも、生き抜くための技術を伝承するとともに、災害に備える自立した人材を養成するため、小屋づくりや井戸づくり等に取り組んでいます。

プロジェクトの概要

■背景・目的は？

展望デッキ、バイオトイレは造りましたが雨露寒さをしのぐ為の小屋はまだです。3坪の小屋を板倉手法で皆で建てながら大工技術や家づくりを学びます。

井戸掘り、水を確保し煮炊きの出来る場をつくれば避難体験生活ができます。
食糧の調達も学ばなければなりません。こうしたことを体験を通して学ぶ場とする計画をしています。

生きる基本となる一次産業地域として生産と共に活動人口を増やし経済を活性化する事が急務です。この地とそこに住む人々の知恵を学 びの場として活用する事により人を集めるしかけが必要です。

また、災害列島日本に住む人々に防災と共にその時生き抜く事の出来るスキルを持った人々を創る事が大切と考えています。

■具体的な活動は？

1. 2019年、コロナ禍における現地に訪れられない学生が繋がり、情報発信団体として海の見える命の森学生委員会を2020年に設立。海の見える命の森学生委員会では、全国の高校生･大学生がオンライン上で連携し、海の見える命の森の広報活動やプログラム企画等を行なっております。現在は29名が所属しております。
   Home page･Instagram･facebook
2. 第6回「ジャパン･ツーリズム･アワード」入賞（2020年）
   「人と自然との持続可能な共生と共創」を南三陸から世界へ発信しました。
3. 一般社団法人「3･11伝承ロード推進機構」が進める宮城県第3分類 震災伝承施設に登録（2021年度）
   上手くいった点および活動として、体験プログラム参加数が、コロナ禍により予定数より少なくはなりましたが、それでも参加した次代を担う若人達は、次の災害に備える避難所体験を通じて、「習うより慣れろ」「トライ&エラー」「一人の力は微力なれど無力に非ず」「遣れば出来る」など数々の海の見える命の森ボランティア隊長語録に勇気づけられました。
   下記のような体験による教訓を得られたとの参加者からの振り返りを貰えた事も何物にも代えがたい人と人とのつながりのキズナと成り得ました。

●参加者振り返り

- 大学2年生　小屋創り
  初めて海森に行った時、テレビでよく見る景色やなって思いました。
  そのあと、現地の方のお話を聞いて、災害があったら避難場所、普段はみんながピクニックして楽しめる憩いの場そんな盛りを目指していることを聞いて、自分も力になりたいと感じました。
  避難小屋が完成すればもっと素敵で魅力的な場所になると確信しました。
  大工さんの太鼓判ももらった避難小屋だからこそ、屋根までつければいざというときも雨風を凌げ煮炊きができます。
  また、柱になっているのはこだわりをもって選んだ栗の木です。土に穴を掘りぷっさし方式というやり方で小屋がたつという事にすごく勉強になりました。
  完成が楽しみで仕方ないのと、完成したらまた海の見える命の森に訪れて炊事したいと思います。
- 大学4年生　井戸創り
  きっと海森のことを知らないが目にしたら、「どんな場所なのだろう」とそう思うかもしれせん。
  でも、一度訪れれば、魅力あふれる場所だとすぐに分かると思います。私も初めて海森に行った時、被災地の現状･被災者の方々の本当の想い知り、何も知らない自分が情けなくなりました。災害大国である日本にいる以上、背けてはならないとそう強く思うことも出来ました。海森に来 るきっかけは人私自身、一年半前に井戸の穴掘り部分を作りましたが、そこで何かができる状態ではなかったので、やはり今年井戸が完成したら地元の方々とゆっくりするのが理想です。
  癒しの場になればいいなっと思っています。

- 高校3年生　井戸創り
  私は、今年、海森のボランティアに参加しました!震災当時,私は小学一年生でした。あの時何もできなかったことが悔しくて,何か役に立ちたいと思いボランティアに参加しました。「震災の時はどうだったの?」と聞いてくれる方がいたりしてとても嬉しいし,県外から時間をか　けてまで来てくださった方々とともに活動することでとても充実した日々を過ごしたと感じます。
  この海森の役割は、私は人との関係を作るためのものだと思っています!井戸を作りたいと思って集まった方との出会いは素敵になると思います。井戸を作るということ自体がなかったら,一生出会わなかった人かもしれません。そう考えると,とても素敵ですよね★
  一緒に参加してくださった方々と,海森で出会えたご縁を大切にこれからも海森の活動を広めていきたいです!!
  そして、私はそこに集まった方々とご当地の話で盛り上がりたいです!おいしい郷土料理とか,方言とか…そういう楽しい話をみんなで輪になって話せたらいいなぁと思っています。
- 大学の所属サークルの後輩に隊長を紹介してもらい、海森のボランティアに参加いたしました。
  東日本大震災が発生した時私は小学5年生で、ニュースを見て初めて見る光景に驚きました。ですが、自分（※以下データ無し）

備災体験として井戸掘り水源創り：4月

同：4月

同：5月～6月

同：7月

■活動の成果は？

コロナ禍における中で地域も疲弊しており、巣籠する若者だけでなく高齢者も外にでなくなっていましたが、この海の見える命の森に散策路が完成すると散歩コースとして活用されるようになりました。

その理由として大勢の人がいない、自然の中で三蜜ではないということが地域の高齢者にとって外に出るきっかけとなり歩け歩け運動にもつながったのは波及効果の何物でもありません。

コロナ禍における中でボランティアが平年よりも集まらない中で、全国津々浦々の次代を担う若者達が海の見える命の森に、今回の助成金を活用した避難所訓練水源プログラムに参加する為に訪れてたくさんの人と人との関りから気づきを得てもらえた事は、コロナ禍だからこそ見えてきた事でもあると得心しています。

備災体験として井戸掘り水源創り：8月

同：8月

同：8月

同：9月

団体からのコメント

旅行会社と連携した教育旅行の受け皿や、全国のNPO団体、学生サークル等と連携による参加者広報周知を今年度から拡散しようとしている中で、今般のコロナ禍による全国の広報周知、説明会等の全ての活動を休止せざるえない状況に追い込まれたピンチをチャンスととらえ、これまでの4年間にて全国津々浦々にいる海の見える命の森にボランティアに訪れた次代の若人達とのネットワークを構築するためのSNSを活用した情報発信が、新型コロナ禍に負けない志の共有と、コロナウィルスによる新たなる日常の希望の光となるプロジェクトの為にテレワーク活動を通じて東日本大震災にて被災した地から、被災した者から発信しつながる事が都市部にいるこども達のストレス緩和や新たなる生活のきっかけになる価値があると得心します。

当初のプログラム参加者は、夏休み200名、冬休み50名、春休み200名でしたが、結果的には、夏休みは、28名どまり、春休みは2名、夏休みの減災語り部ガイドは34名、春休みの減災語り部ガイド58名となり合計で92名でした。ボランティア数も例年の3分の1にとどまり、やはり大幅な実施計画の下方修正が必要とされたのは、新型コロナウィルスによる全国緊急事態宣言に伴う活動休止状態の時期や、団体としての全国津々浦々を廻っての参加者説明会を自粛しなければならず、当初予定されていた団体やサークル受け入れも全てキャンセルか延期となり苦戦を強いられました。予算的にもこのコロナ禍において厳しいマンパワーの削減により、物づくりの大変さも浮き彫りにされました。

東日本大震災から次の10年に向けて、海の見える命の森活動を7年目を迎え来訪者と地域に注目される活動となっています。コロナウィルスの問題解決後は、自然との共生が意識され活動を後押ししてくれるでしょう。若者たちに静かではあるが、着実に浸透しつつあります。

© Tohoku-Electric Power Co.,Inc. All Rights Reserved.